

小学校英語における読み書き導入および中学校英語科との連結

猪井 新一*

(2017年10月25日受理)

Introduction of Reading and Writing into Primary School English Education and Linking to Junior High School English Education

Shin'ichi INOI

キーワード: 小学校英語, 文字導入, 読み書き, 中学校英語

本稿の目的は、小学校英語教育において、どのような読み書き活動が求められているか、そしてそれらの活動を中学校英語科にどのように接続したらよいかについて、新旧学習指導要領の内容を概観・比較し、先行研究を調査することである。新小学校学習指導要領によると、外国語活動の目標はより明確、具体的になっている。ただし、これまで通り原則として、文字指導は行わない。アルファベットの大文字・小文字を聞く活動を通して体験的に慣れ親しませる程度である。新設された小学校外国語科では、アルファベットの大文字・小文字を識別し、書けるようにする。また、音声で十分に慣れ親しんだ語句や基本的な表現を読み書きする。中学校英語科では、小学校で慣れ親しんだ語句や表現をコミュニケーション活動を通して定着を図る。小学校英語教育、中学校英語科ともにコミュニケーションを意識した読み書き指導が大切であり、それも体験を通じた指導が大切である。

はじめに

2020年度より正式に小学校5,6年生を対象に外国語(英語)が教科として導入され、3,4年生対象には外国語活動が実施されることとなった。2011年に5,6年生対象に週1回の外国語活動が必修化され、2020年ではほぼ10年が経過することとなる。2017年3月には、新小学校及び中学校学習指導要領が告示され、同年6月および7月にはその解説書も公表された。これまでの小学校外国語活動においては、英語の文字指導はアルファベットの大文字・小文字に触れることとし、その理解にとどめるなど、極めて限定的な扱いであり、本格的な英語の読み書きは行われてこなかった。

*茨城大学教育学部

しかし、小学校において英語の教科化が始まると、初歩的とは言え英語の読み書きが導入され、これまでとは小学校の英語教育の内容が大きく異なることが予想される。また、単純な機械的な反復練習による単語や英文の読み書き指導が小学校英語に持ち込まれれば、英語嫌いとなる児童が増加することが心配され、慎重な文字指導の導入は必須である。

本稿の目的は、小学校英語教育において、どのような読み書き指導が求められているかについて、そしてそれらの活動を中学校英語科にどのように接続したらよいかについて、新旧学習指導要領を概観・比較し、先行研究を調査することである。方法として、1) まず、小学校英語における文字指導・読み書き指導に関して、新旧小学校学習指導要領を比較する。2) 次に、これまでの小学校外国語活動における具体的な文字指導について、『Hi, friends!』および他の先行研究を調査する。3) 新中学校学習指導要領における英語の読み書き指導を概観し、小学校英語教育の文字指導をどのように結びつけるかについて考察をする。

文字指導・読み書き指導に関する新旧小学校学習指導要領の比較

小学校英語の文字指導・読み書き指導に関して、2008年と2017年の小学校学習指導要領を比較する。2008年版では英語教育は5,6年生を対象とした外国語活動であるが、2017年改訂版では3,4年生を対象とした外国語活動および5,6年生を対象とした教科としての外国語(英語)がある。なお、新旧小学校学習指導要領を比較する際には、同解説書を利用する。

1) 外国語活動における文字指導に関する新旧小学校学習指導要領の比較

旧学習指導要領(文部科学省, 2008)によると、外国語活動は、あくまで音声によるコミュニケーションを体験させることが重要であるとし、次のように述べている。

イ 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。

(文部科学省, 2008, p. 19, 下線部筆者)

さらに、アルファベットなどの文字指導は、アルファベットの活字体の大文字及び小文字にふれる程度にとどめ、それも外国語の音声に十分慣れ親しんだ段階で開始するように述べている。発音と綴りの関係、いわゆるフォニックスは中学校段階で扱い、小学校段階では取り扱わないようにも述べている(同書, p. 19)。これは、週1回の英語の授業では、英語の音声に慣れ親しませることが重要であり、読み書きまで指導すると児童に相当な負担をかけ、結果として英語嫌いを生んでしまうとの配慮から、読み書きを含めた文字指導は基本的に行わないとしたのである。

新学習指導指要(文部科学省, 2017a)における外国語活動は、目標や指導内容を概ね2008年版を踏襲している。小学校中学年から導入する外国語活動は「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通して、外国語に慣れ親しませ、外国語を用いたコミュニケーションを図る素地を育成することを一義的にしている。文字指導に関して、「聞くこと」の目標の一つに次のようなものがある。

「文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかがわかるようにする」(同書, p. 16)。この目標に関して、文字とは活字体の大文字・小文字であり、その名称の読み方が発音されるのを聞いたときに、どの文字であるか認識できることを述べている。例えば、「エイ」と発音された時、アルファベットのAあるいはaと結びつけることである。これは、2008年版の指導内容を一歩進めている。これまではアルファベットの活字体にふれる程度にとどめていたが、今回の改定ではアルファベット文字の名称を聞いた時、どの文字であるかを認識できるようにすると明示したのである。ただ、アルファベットの文字の書き方を指導したり、アルファベット順に文字を暗記させるのではないとも述べている。あくまで、児童の身の回りにある文字を活用して、体験的にアルファベットの文字とその名称の読み方を一致させるような活動が大切であると述べている(同書, p. 16)。そして旧学習指導要領には見られない具体的な文字指導の活動例に言及し、発音された順に文字カードを並べ替えたり、線でつないだり、また、歌やチャンツの中で、文字の読み方に親しませたり、文字の形を指で作ってみたり、形に着目して文字を分類したりする活動などを挙げ(同書, p. 16)、文字指導の具体的な活動内容まで踏み込んでいる。これは、文字指導において、アルファベットの活字体の大文字・小文字を何度も機械的に繰り返して発音して書かせたりすることで、児童の英語学習に対する興味・関心を失わせることのないようにとの意図があるように思われる。

新学習指導要領は「内容の取扱い」の箇所、改めて文字指導について次のように述べている。「文字については、児童の学習負担を配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして取扱うこと」(文部科学省, 2017a, p. 44)。そして、5, 6年生の英語の「読むこと」「書くこと」に円滑に接続するように、文字を題材としたコミュニケーション活動を体験させ、児童に文字に興味・関心を持たせることが大切であると述べている。さらに、具体的な活動として、絵カードの下にその単語の綴りを添えたりすることや、単語の文字数を“*How many?*”を用いて尋ねたりする活動を挙げている(同書, p. 44)。英語の発音と綴りとの関係、つまりフォニックスを扱うことは、旧学習指導要領同様に、児童に対して過度な負担を強いることになるので、不適切であると言いつつ(同書, p. 45)。

新学習指導要領は外国語活動における文字指導に関して、その指導内容をより明確にし、具体的な活動に言及している。また、旧版同様に、フォニックスは外国語活動においては取扱わないこととしている。外国語活動においては、文字指導はアルファベットの活字体の大文字・小文字を取り扱うが、その文字の名称の発音を聞いたときに、どの文字であるかが認識できればよいのであって、その文字を書くことまでは求められていない。むしろ英語の文字に慣れ親しむための様々な活動を体験し、児童が文字に興味・関心を持つことを大切としている。

2) 小学校高学年における「外国語」における読み書き指導に関する新学習指導要領の概要

正式に小学校5, 6年生に教科としての外国語(英語)が導入されることとなったが、読み書き指導に関してどのような目標、内容になっているのかについて概観する。なお、本稿において、外国語と英語は同義語である。また、概観する際に、『小学校学習指導要領解説外国語編』(文部科学省, 2017b)を利用する。

外国語では小学校中学年で実施される外国語活動にはない「読むこと」「書くこと」が新たに加えられ、教科型学習が実施され、中学校英語科への接続を図ることが求められる。外国語科の全体目

標には次の通り、「読むこと」「書くこと」が明示されている。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次の通り育成することを目指す。(文部科学省, 2017b, p. 8, 下線部筆者)

さらに、下位目標の中にも、以下のように、文字指導と密接な「読むこと」「書くこと」が含まれている。

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。(文部科学省, 2017b, p. 10, 下線部筆者)

中学年の外国語活動では、英語の読み書き指導は原則行わないので、外国語科ではまずは読み書きに慣れ親しむことから指導する必要があると、配慮すべき点を付け加えている(同書, p. 11)。「読むこと」「書くこと」の指導すべき内容の順序を次のように具体的に示している。まず、アルファベット文字に関して、

- ① 英語のアルファベット文字の名称の読み方を活字体の文字と結びつけること、
- ② 文字の名称を発音すること、
- ③ 四線上に文字を書くことができるようにする。(同書, p. 12)

次の段階としては、以下のように述べている。

- ④ 中学年の外国語活動において、十分に音声で慣れ親しんだ簡単な語句や基本的表現について、読んだり書いたりすることに細かな段階を踏んで慣れ親しませること、
- ⑤ 語順を意識しながら書き写すことができるようにすること、
- ⑥ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に書くことができるようにすること。(同書 p. 12)

上記⑥は実際のコミュニケーションの場において活用できる基礎的な技能であり、外国語科ではそれを目指す必要があると述べている。

外国語活動では「コミュニケーションを図る素地」の育成であるが、外国語科では「コミュニケーションを図る基礎的な技能」の育成となっており、いわば英語4技能への言及である。それも、英語の文字の読み書き、そして簡単な語句や表現の読み書きを含み、小学校においても実際のコミュニケーションで活用できる基礎的な技能の養成を目指しており、外国語活動の指導内容を相当に発展させた内容となっている。

外国語科の下位目標の2つ目にも、以下の通り「聞くこと」「話すこと」のみならず「読むこと」「書くこと」がやはり明示されている。

- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について聞い

たり話したりするとともに、音声で十分慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。(文部科学省, 2017b, p. 12, 下線部筆者)

さらに解説書は、『推測しながら読む』とは、中学年から単語の綴りが添えられた絵カードを見ながら何度も聞いたり話したりしてその音声に十分慣れ親しんだ単語が文字のみで提示された場合、その単語の読み方を推測して読むことを表している。(同書, p. 13) と述べ、外国語活動において絵カードなどは綴りを添えて提示することが望ましいとしている。中学年の外国語活動と高学年の教科としての英語の接続を意識しているのが読み取れる。

続けて、『語順を意識しながら書いたり』とは、中学年から何度も聞いたり話したりしてその音声に十分に慣れ親しんでいる基本的な表現を書き写す際に、英語で何かを表す際には、決まった語順があることへの気付きを踏まえ、語と語の区切りに注意してスペースを置き、それを意識しながら書くことを表している。(同書, p. 13) とも述べ、やはり中学年の外国語活動において慣れ親しんできた基本的な表現を高学年の外国語において書き写す対象であるとしている。音声で何度も聞いたり、話したりして慣れ親しんだ英語の単語、表現を読んだり、書いたりする文字指導は、個々のアルファベットの文字 (letter) をひとつずつ読み書きするような学習ではなく、単語全体、表現全体を、これまで慣れ親しんできた英語音声に基づいて、読み書きすることを示している。

外国語科の目標を踏まえ、英語では5領域(「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やりとり]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」)のそれぞれに関して目標を設定している。以下に、英語の文字および読み書きに関する記述を概観する。

「読むこと」について、新学習指導要領では以下の2つの目標が設定された(文部科学省, 2017b, pp. 18~19)。

- ア 活字体で書かれた文字を認識し、その読み方を発音できるようにする。
- イ 音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味がわかるようにする。

アに関して、活字体の文字を見て、その名称を発音できることを示している。これは外国語活動の「聞くこと」の目標の1つで、文字の名称の読み方を聞いて、文字と結びつけることを逆にしたもので、一歩段階を進めている。発音と綴りの関係性を指導するフォニックス指導は、小学校では行わないと再度述べている(同書, pp. 27-28, p. 43)。イに関しては、外国語活動において音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かり、それらを推測して読むようにすることを示している。

「書くこと」については、以下のように、2つの目標を設定し、解説している(同書, pp. 22-23)。

- ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。
- イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡

単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

アに関して、「a, c」「g, y」などの文字の高さの違いを意識させたり、「p, q」「b, d」など紛らわしい形を意識させることが必要であり、A aからアルファベット順に指導する必要はなく、A, H, Iなど左右対称の文字、C c, J j, K kなど大文字、小文字の形がほぼ同じなものなど、文字の形の特徴を捉えて指導する必要があると、アルファベット文字指導に関して、かなりきめ細かい指導を提案している（同書、p. 22）。

イに関して、名前や年齢、趣味、好き嫌いなど自分の関する事柄について、英文で書かれた文、又はひとまとまりのある文章の一部を利用して、例示された語句、あるいは文の中から選んだものに置き換えて、自分に関する文章を書く活動を提案しており、いわゆる「英借文」と言われるものである。既に提示されている英文を利用して、単語や表現を入れ替えたりして、自分の言いたいことを書くことを勧めている。例示された中に、児童の表現したい語句などがない場合は、指導者は児童が書きたい語句を英語で提示するなど、柔軟に対応することが必要であるとしている（同書、p. 23）。

高学年の外国語科で扱う言語材料のうち、文字および読み書き指導に関わるものは次の通りである。

ア 音声：現代の標準的な発音

イ 文字及び符号：(ア)活字体の大文字、小文字、(イ)終止符や疑問符、コンマなどの基本的符号

ウ 語、連語及び慣用表現：(ア) 外国語活動で取り扱った語を含む 600~700 語程度の語

エ 文及び文構造 (同書、pp. 24-37)

アの音声に関して、Fのような文字を見て /ef/ とその名称の読み方を扱うこととすると、再度文字の名称の読み方に言及している。

イ文字および符号の (ア) 活字体の大文字、小文字に関して、再度、発音と綴りの関連性は中学校外国語科で指導すると述べ、小学校外国語科では扱わないとしている（同書、pp. 27-28）。文字の形や長さなどは、他の文字と区別して認識できるように丁寧に書いたり、適度な速さで書いたりすることを意識させ、コミュニケーションを行うために文字を書くことを意識させるとした。小学校3年生の国語科でのローマ字指導に言及し、日本語のローマ字表記と英語の文字表記の違いに気付かせながら指導することについても述べている（同書、p. 28）。国語科のローマ字指導は訓令式で行われるが、英語の文字指導はヘボン式であることを意識したものである。例えば、ひらがなの「し」は訓令式では「si」と表記される。これは日本語の「し」の音を子音字と母音字で表記することが可能であることを示したものであり、パスポートなどに用いられる“shi”のヘボン式とは異なる。英語文字表記ではヘボン式を用い、この違いを指導することが必要であると述べたものである。筆記体は、フォニックス同様、小学校外国語科では扱わないとしている（同書、p. 28）。

(イ) 終止符や疑問符、コンマなどの基本的符号に関して、書くことが導入されるため、それに伴い終止符（.）、疑問符（?）、コンマ（,）を指導することになる。外国語科では、単文を扱うこととされているので、コンマは呼びかけを示す際や、語や句を3つ以上列挙する際に用いる。それも、音声で十分慣れ親しんだ基本的な表現の中で終止符や疑問符、コンマなどの符号を示したり、書き

写させたりするようにすると述べている（同書，p. 29）。

ウ 語、連語及び慣用表現に関して、語は600～700語程度を指導するが、小学校段階で求められる定型の挨拶や、自分や身の回りの物事に関する簡単な描写や質問と応答、自分の気持ちや考えを述べる最も基本的な言い回しなどに必要な語数である。これらの語数は「話すこと」「読むこと」に関わる発信語彙（Productive vocabulary）と「聞くこと」「読むこと」に関わる受容語彙（Receptive vocabulary）の両方を含むが、聞いて意味を理解できるようにする語彙と話して表現できるようにする語彙が中心となる。したがって、600～700語をすべて読み書きできることまでは必要ない。小学校中学年の外国語活動の学習内容を、高学年の外国語科、そして中学校の外国語科まで繰り返し活用し、定着させることが大切である（同書，pp. 29-30）。

エ 文及び文構造に関して、日本語と英語の語順の違い等に気付かせるとともに、基本的な表現として、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用することとなっている。繰り返し触れる中には、当然読んだり、書いたりすることが含まれる。

「言語活動及び言語の働きに関する事項」では、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」および「書くこと」の5つの領域ごとの具体的な「①言語活動に関する事項」と「②言語の働きに関する事項」を設けている。そして言語活動を行う場合は、単に機械的な繰り返し活動を行うのではなく、児童が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるように、具体的な課題を設定し、その目的を達成するために必要な言語材料を取捨選択して活用することができるようにすることが必要であるとしている（同書，p. 40）。この事項における「読むこと」「書くこと」に関する活動例は、以下の通りである。

「読むこと」に関する言語活動は以下のように4つの活動を挙げ、解説している（同書，pp. 42～44）。

- (7) 活字体で書かれた文字を見て、どの文字であるかやその文字が大文字であるか小文字であるかを識別する活動。
- (4) 活字体で書かれた文字を見て、その読み方を適切に発音する活動。
- (9) 日常生活に関する身近で簡単な事柄を内容とする掲示やパンフレットなどから、自分が必要とする情報を得る活動。
- (5) 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的表現を、絵本などの中から識別する活動。

(7)の活動は、読むことの中でも、最も基本的な活動とし、活字体 A, B, a, b はそれぞれ /ei/, /bi:/ を表した文字であると認識することである。例として、“My name is Haruna.”と自己紹介して、“H, a, r, u, n, a”とその綴りの文字の名称を言う活動を挙げている。

(4)の活動において、「読み方」とは文字の名称の読み方を指しているが、文字には名称と音があることを気付かせることが大切である。例えば、“k”が/k/と発音することに慣れ親しんだ後、kで始まる単語を、ペアやグループ内で協力し合いながら制限時間内にできるだけ多く言わせる活動を提示している。

(9)の活動は、簡易な海外旅行パンフレットやテレビ番組欄などから必要な情報を得る活動である。読ませる英語は語句や1～2文程度の単文である。その前段階として、個々の単語の発音に音声で

十分慣れ親しむ活動などが必要である。

(E)において、2つの具体的活動を挙げている。1つは絵本などの英文を読んで、その中から音声で十分慣れ親しんだ語句や基本的表現を識別する活動である。絵本の読み聞かせ中に、絵本の文を指さしながら“Where is ‘red’?”と問いかけ、その語を英文から見つけさせるような活動である。2つ目は、音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な英文を読んで、その意味を理解する活動である。

「書くこと」に関する活動は、以下の通りである（同書、pp.49-52）。

(7) 文字の読み方が発音されるのを聞いて、活字体の大文字、小文字を書く活動。

(4) 相手に伝えるなどの目的を持って、身近で簡単な事柄について、音声で十分慣れ親しんだ語句を書き写す活動。

(5) 相手に伝えるなどの目的を持って、語と語の区切りに注意して、身近で簡単な事柄について、音声で十分慣れ親しんだ基本的な表現を書き写す活動。

(E) 相手に伝えるなどの目的を持って、名前や年齢、趣味、好き嫌いなど、に関する簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いた例の中から言葉を選んで書く活動。

(7)に関して「読み方」とは文字の名称である。具体例として、活字体のメールアドレスを電話でやり取りする活動を挙げている。この事項の最終目標として、児童は何を見ることなく、活字体の大文字、小文字を書くことができるように指導する。指導の留意事項としては次の通りである。

・「聞くこと」の活動により文字の読み方に十分慣れ親しませ、「読むこと」の活動において、文字を認識し、その名称を発音させた後に、この書く活動を行うようにし、順序性を踏まえる（同書、p.49）。

・活字体の大文字・小文字を一度に全て取り扱うのではなく、児童の実態に応じて一度に取り扱う文字の種類や数に配慮する（同書、p.49）。

・「ドリル学習」のような単なる反復学習に終始するのではなく、何らかの書く目的を持たせたり、ゲーム的要素を取り入れ、児童の学習意欲を高める（同書、p.49）。

・「書くこと」の活動は教師が想像する以上に時間がかかる場合があるので、授業においては十分な時間を確保するとともに、四線上に正しく書くことができるようにする（同書、p.49）。

(4)に関して、例えば、自分の行ってみたい国を「話すこと」の活動に取り組み、「読むこと」の活動により、国名を表す単語を読んで意味がわかるようにした後、国名一覧を見ながら、自分の行きたい国の国名の表現を書き写す。ややもするとただ書かせるだけの機械的な指導に終始する可能性があるため、例のように目的を持たせることが必要である（同書、p.50）。

(5)は基本的な表現を書き写す活動である。前述の(4)同様に、目的を持って活動させる必要がある。例えば、何曜日に英語の授業があるかを表現できるように、「話すこと」の活動を通して、その表現に音声で慣れ親しみ、書かれている英文を見ながら書き写すなどが考えられる（同書、p.50）。

(E)は、「書き写す」ではなく、例となる文を見ながら、自分の考えや気持ちを表現するために、例となる語や表現から選んで書くことを示している（同書、p.50）。

以上、新小学校学習指導要領の外国語科における文字指導、読み書き指導に関する概要を見てきたが、中学年の外国語活動の指導内容を相当発展させたものと言える。アルファベットの活字体の

大文字・小文字を認識し、その読み方を発音できるように、そして書くことができるようにする。機械的な繰り返し練習に終始することなく、体験的な活動や目的のある活動をすることが大切である。指導の順序もあり、段階を踏んだ指導が大切である。音とつづりの関係を扱うフォニックスは小学校外国語科でも取り扱わない。

文字指導・読み書き指導に関する具体的活動例

1) 『Hi, friends!』に見られる文字指導

新小学校学習指導要領外国語活動及び外国語の解説書で、具体的な文字指導・読み書きに関する具体的活動例の記述が多々見られるが、ここでは、多くの小学校で外国語活動の教材として使用されている『Hi, friends!』を見ることにする。『Hi, friends! 1』, 『Hi, friends! 2』とも以下のように、文字指導の活動例は極めて限定的である。

① 『Hi, friends! 1』は Lesson 6 においてのみ文字を扱っている。それもアルファベットの大文字のみである。紙面の絵の中にあるアルファベットの文字を指差すポインティングゲームが活動としてある。さらに、音声を聞いて、アルファベットの大文字を線で結んだり、身の回りのものからアルファベットを書き写させたりする活動がある。『Hi, friends! 1』ではアルファベットの大文字のみを扱い、小文字は扱っていない。

② 『Hi, friends! 2』は Lesson 1 のみでアルファベットを扱っている。もちろん、英語以外の外国語（アラビア語、ロシア語、ハンガル、中国語など）の文字を提示し、英語の文字だけを扱わないように配慮している。Lesson 1 では、ポインティングゲームなどを通して、テキスト紙面にある、アルファベットを指で指し示す活動などがある。『Hi, friends! 1』とは異なり、大文字のみならず小文字も扱っている。テキスト紙面から、アルファベット *tbs news* を書き写したりする活動や、クイズ形式でアルファベットを紹介する活動などが紹介されている。

以上①、②の活動はともに、新学習指導要領においては、概ねアルファベット文字の認識に関わるものである。『Hi, friends! 2』では、アルファベットを書き写す活動も含まれており、これは新学習指導要領の外国語科の「書くこと」で扱われている内容である。

2) 先行研究に見られる文字指導・読み書き指導の具体的活動例

文字指導を扱っている先行研究を3つ紹介し、新小学校学習指導要領の観点から見ることにする。

① 和歌山県教育センター（2009, p. 8）は、基本的単語を用いて、図1のようなワークシートから、単語を探す活動を提案している。最初は学級担任が例として、“cat”に1つ印をつける。この活動は、小文字を使用しているが、“cat”と“dog”という文字の連続体がいくつあるかを探す活動である。これらの表現は外国語活動において音声で十分に慣れ親しんでいることが前提である。この活動は、音声で慣れ親しんだ“cat”と“dog”を、アルファベットの文字列から探す、つまり簡単な語句を識別する活動であるため、新学習指導要領の外国語科の「読むこと」の目標イに関する活動例である。

c	a	t	b	e	g	How many cats?
d	o	g	d	o	g	()
f	i	c	a	t	j	How many dogs?
h	a	k	d	o	g	()
c	c	a	t	d	d	

図 1 単語探しワークシート

② 樋口他(2013, pp. 73-75)は文字指導に関して、次の4段階を示している

- (1) アルファベットの文字の認識・理解。単語全体として捉えさせる。活動としてアルファベット並べ、文字当てクイズ、文字探し、文字読みと音読み等。
- (2) 大文字、小文字の認識。活動として、ビンゴゲーム、線つなぎ、大文字と小文字のカードあわせ、神経衰弱など。
- (3) 音声で十分慣れ親しんだ単語を、ひとかたまりとして読ませる。活動として、カルタ取り、単語探し、単語カード並べ(単語のつづり順に、文字を並べる)など。
- (4) 音声で十分慣れ親しんだ基本文(例 I like dogs.)を、指導者の後について読ませる。絵本を利用し、紙面の曜日、数、食べ物の名前の文字に注目させたり、指導者について読ませる。

(1)は、概ねアルファベットの認識に関わる活動であり、新学習指導要領の外国語活動の範囲内にある。ただアルファベットの「音読み」は外国語科の活動である。(2)もアルファベット認識活動であり、外国語活動内の活動である。(3)(4)は音声で十分慣れ親しんだ表現を読ませているので、外国語科の「読むこと」の活動例である。

同書は、書くことに関しては、以下の3段階を提案している。

- (1) アルファベットの大文字・小文字を、なぞったり、書き写させる。
 - (2) 基本的な単語の最初の文字を書き入れさせる。(例 □og)
 - (3) 示された語彙群から、自分に必要な単語を、空所に書き入れさせる。この活動の延長として、自己紹介・誕生日カード作成などがある。
- (1)～(3)はいずれも新学習指導要領の外国語科の「書くこと」に関する活動例である。特に(3)は、相手に伝えることを目的としたもので、コミュニケーションを意識した活動例である。

③ アレン玉井(2010)は外国語習得の初期段階から文字指導の重要性を説いている。氏は、外国語活動において文字を基本的には扱わないことに対して、もともと疑問を抱いており、文字指導に関しては早期から導入すべきとして、様々な文字を扱った活動を紹介している。ボトムアップアプローチの指導方法として、アルファベット指導、フォニックス指導、サイトワード指導(単語を分解しないでそのまま指導する方法)等を挙げている。トップダウンアプローチとして、絵本の読み聞かせ指導などを挙げている。この2つのアプローチを組み合わせながら指導することが望ましいとしている(pp. 130-132)。

氏はアルファベット指導としては、アルファベット大文字認識させるためのアルファベット歌、アルファベ

ットの並べ替え、カルタ取り、アルファベットの伝言ゲーム、人文字アルファベット、単語探し(図1を参照)などの様々な活動を紹介している(pp. 177-185)。これらの活動はいずれも、アルファベットの認識に関わる活動で、さらに文字まで書くことを求めているため、外国語活動内の活動例である。音韻認識を育てるため活動としては、まずはローマ字学習を提案し、日本語の音が子音+母音から構成されていることを発見でき、音素を認識させるのに有効であるとしている。次に、語頭の子音、語中のライムなどを扱うゲームなどにより、アルファベット文字の名称の発音の音素認識活動に移行することを提案している(pp. 188-198)。前述したように、氏は、英語文字の読み書きの早期段階導入の主張者であるから、フォニックス指導も活動例として挙げているが、これは新旧小学校学習指導要領の指導内容とは相いれない。

新中学校学習指導要領に見られる外国語科の読み書き指導

ここでは『中学校学習指導要領解説外国語編』(文部科学省, 2017c)に見られる外国語科の読み書き指導の概要を述べ、小学校における文字指導および読み書き指導の中学校外国語科への接続のありかたをみる。

小学校中学年における外国語活動、高学年における外国語の導入を踏まえ、中学校外国語科では5つの領域(「聞くこと」「話すこと[やりとり]」「話すこと[発表]」「読むこと」「書くこと」)の言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することとなる(文部科学省, 2017c, p. 8)。「読むこと」に関しては、以下のような目標が設定された。

- ア 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。
- イ 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。
- ウ 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。(文部科学省, 2017c, pp. 18-20)

活動例としては以下の通りである。

- (ア)書かれた内容や文章の構成を考えながら黙読したり、その内容を表現するような音読したりする活動。
- (イ)日常的な話題について、簡単な表現が用いられている広告やパンフレット、予定表、手紙、電子メール、短い文章などから、自分が必要とする情報を読み取る活動。
- (ウ)簡単な語句や文で書かれた日常的な話題に関する短い説明やエッセイ、物語などを読んで概要を把握する活動。
- (エ)簡単な語句や文で書かれた社会的な話題に関する説明などを読んで、イラストや写真、図表なども参考にしながら、要点を把握する活動。また、その内容に対する賛否や自分の考えを述べる活動。(文部科学省, 2017c, pp. 55-57)。

中学校外国語科における「読むこと」は、読み手の目的に応じて、必要な情報を読み取ったり、まとめたりあ

る文章から概要や要点を理解したり、さらには活動例の(エ)のように読み取った内容についての賛否、感想、意見なども話したり、書いたりして、「読むこと」を他の領域の活動へ結び付けることが大切であるとしている(同書, pp. 58)。中学校における「読むこと」とは、小学校の外国語科の「読むこと」からは相当にその内容が異なっている。小学校外国語科ではアルファベットの大文字・小文字を認識したり、音声で慣れ親しんだ表現の意味が分かるようになることが「読むこと」であったが、中学校では相当にそれを発展したものとなっている。小学校外国語科の「読むこと」を、中学校外国語科の「読むこと」にどのように接続していくかについて、その橋渡しを丁寧にする必要がある。新学習指導要領には、「読むこと」の領域に関して、その接続の部分の記述はあまり見られない。

「書くこと」の領域については、以下の通り3つの目標と4つの活動例を挙げている。

目標

- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。
- イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなど整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。(文部科学省, 2017c, pp. 25-27)

言語活動例

- (ア) 趣味や好き嫌いなど、自分に関する基本的な情報を語句や文で書く活動。
- (イ) 簡単な手紙や電子メールの形で自分の近況などを伝える活動。
- (ウ) 日常的な話題について、簡単な語句や文を用いて、出来事などを説明するまとまりのある文章を書く活動。
- (エ) 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき、自分の考えや気持ち、その理由などを書く活動。(文部科学省, 2017c, pp. 63-66)

以上中学校外国語科の「読むこと」「書くこと」の目標をまとめると、小学校における英語学習で何度も音声で触れた語句や表現および中学校で扱う語句や文を用いて、自分の関心のある事柄、日常的话题、社会的な問題などについて、正確に、論点を整理して、読み手を意識して書くことが求められている。

活動例に関して、解説書は、活動の仕方などについてかなりきめの細かい手立てを示している。例えば、「書くこと」の苦手な生徒には、何をどのよう用に書けばよいかを指導する必要があるとして、自分の考えや気持ちをペアやグループで簡単な語句や文を用いて口頭で伝える活動をした後に、その内容を書いてまとめることを述べている(同書, p. 63)。さらに、書く活動を行う前には、手本となるような文章を数多く提示し、その表現を活用したり入れ替えたりしながら書き方を学ばせたいうえで、その後自力で書くことができることようにする段階を踏むことが必要であるなどと述べている(同書, p.63)。既述の「読むこと」の活動例と「書くこと」の活動例の記述を比較すると、「書くこと」の記述の方が細かな指導の段階を示すなど、かなり詳細である。これは、おそらく、「読むこと」よりも「書くこと」においての方が、多くの生徒が苦手意識を持つであろうと予想したためと、「書くこと」もコミュニケーション活動の一部であることを学習者に意識させたいと思われる。

2017年版の新中学校学習指導要領は、指導計画の作成上の配慮事項として、小学校や高等学校における接続に触れている。「読むこと」も「書くこと」も意味の伝達に関わる点では、コミュニケーション活動で

あり、意味内容に留意することが大切であるとし、「書くこと」の活動の場合、何のために、誰に対して書くのかを意識させることが必要であるとも述べている(同書 p. 80)。さらに、小学校で学習した簡単な語句や基本的な表現の定着を図るために、ただ単に機械的に繰り返して学習するのではなく、意味のある文脈の中でコミュニケーションを通して定着を図ることができるように工夫することが大切であるとも述べている(同書, p. 82)。さらに、文字指導において活字体の大文字・小文字は中学校でも引き続き指導することとし、必要に応じて筆記体を指導しても良いとしている(同書, p. 88)。フォニックス指導については、ある程度単語の綴りと発音には対応関係があることを認め、単純なものから徐々に指導することが必要であり(同書, p. 88)としており、細かな規則にこだわって全面的に指導するのではないとも述べている(同書, p. 86)。

まとめ

本稿では英語の文字指導、読み書き指導を中心に、新旧小学校学習指導要領、新中学校学習指導要領などを概観し、『Hi, friends!』や他の先行研究などの活動例を見てきた。従来中学校外国語科で実施されていた文字指導は、小学校外国語科で行われるようになり、英語を聞く・話すを中心としてきた小学校英語教育の内容が大きく異なることになる。「読むこと」、「書くこと」が小学校に導入されるが、聞いたり、話したりしたことを書いてまとめたり、読んだことを話したり、書いたりしながら、「聞くこと」、「話すこと」の領域にも結び付けることが必要である。中学校外国語科では、「読むこと」「書くこと」それ自体がコミュニケーション活動であるという意識を学習者が持てるように指導することも大切であり、小学校の外国語活動や外国語科で学習してきた単語や語句を、単純な繰り返し学習ではなく、コミュニケーション活動を通して定着させることが必要である。新小学校学習指導要領は、指導の活動例や指導順序を示し、さらに、新中学校学習指導要領はコミュニケーションを意識した英語指導の大切さを説くなど、指導の目標や内容に踏み込んだものとなっている。実際の指導の際には、以上のことを十分意識する必要がある。

引用文献

- アレン玉井光江. 2010. 『小学校英語の教育法—理論と実践』(大修館).
- 樋口 忠彦, 加賀田哲也, 泉 恵美子, 衣笠知子(編). 2013. 『小学校英語教育法入門』(研究社).
- 文部科学省. 2008. 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』(東洋館出版).
- _____. 2017a. 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afildfile/2017/07/25/1387017_13_1.pdf (2017年8月1日閲覧)
- _____. 2017b. 『小学校学習指導要領解説外国語編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afildfile/2017/07/25/1387017_11_1.pdf (2017年8月1日閲覧)
- _____. 2017c. 『中学校学習指導要領解説外国語編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afildfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf (2017年8月1日閲覧)
- 和歌山県教育センター. 2009. 「外国語活動の効果的な指導に関する実証的研究—『英語ノート』およびICT教材を活用した授業モデルの構築—」『和歌山県教育センター学びの丘研究紀要』, pp.1-30. <http://www.wakayama-edc.big-u.jp/kenkyukiyo21/H21/H21-4.pdf> (2017年8月1日閲覧)